

第37歩

コロナ禍の中の瀬戸内国際芸術祭

去る4月14日から5月18日までの35日間、5回目となる瀬戸内国際芸術祭2022（私は実行委員会副会長）の春会期が開催されました。前回、2019年の開催では約118万人の方が来場して、大変な賑わいを見せた今や日本を代表する芸術の祭典とも言えるイベントです。当時、インバウンド需要の盛り上がりもあり、来場者の24%を外国人が占めていたと言うから驚きです。また、芸術祭のボランティアスタッフである「こえび隊」の作品受付業務に従事した4000人余のうち、約36%が外国人だったという記録が残っています。国際芸術祭の名に恥じない、文字通り国際色豊かな質の高いイベントとして完全に定着するかに見えました。2019年暮れには、世界的な旅行サイトであるグツキングドットコムで2020年に訪れるべき目的地として、高松市が日本で唯一世界の十選に選ばれる栄誉も得たところです。

しかし、そこに新型コロナウイルス感染症のパンデミック（大流行）が襲ってきました。水際対策として、海外との人の行き来は中断を余儀なくされ、インバウンドの観光客はほぼゼロとなりました。はやく収束に向かうことを祈るばかりですが、発生から2年半近くが経っても未だ明確な見通しはたっていません。

コロナ禍の中では、外国からの来場者が期待できないのは言うまでもなく、国内の来場者も移動や人数、密度に制約がかかります。そのため、今回の瀬戸芸は、比較的静かなスタートとなりました。

とにかく大切なのは、感染対策を徹底して安全を確保し、瀬戸内の海や島の風情を味わい、安心して芸術祭を楽しんでいただけることです。主な会場が離島だけに、感染者が出たときに拡大をいかに確実に食い止めるかも重要になってきます。島ごとやケース別の対応をきめ細かく示した「感染症対策の指針」に基づき、島に渡る前後の検温、体調確認の徹底、島での住民との距離の取り方など、必要な措置を適切に講じてまいります。そして、ウイズコロナの時代の文化イベントの在り方として、一つのモデルとなれるよう高松市としても努めてまいります。

